

自然とのふれあい（その1）

——夏やすみ——

斎藤 芳子

数年前から、夏やすみをのびのびと自然の中で遊んで、家族ぐるみで自然への関心を育て、心とからだの成長を願って、左の様なおたよりを家庭に届けております。

◆夏やすみのおねがい（園からおたより）

夏の短い東北です。出来るだけ夏の解放された生活の中で、空と海と太陽の季節を、たのしく自然にふれて、のびのびと過して下さい。

飼育する小鳥、小動物の世話、草花や野菜の世話や観察、庭先の草取りのお手伝いをたのんで、蟻や小さな虫の発見など……。

親・子で自然とのふれあいを、心にゆとりを持って、大切な「気づき 学ぶ時」として遊んでやって下さい。その時の対話や、様子などを書きとめて二学期の始業時にお持たせ下さい。

記録の仕方例

親「お庭の草取り、少しだけ手伝ってちょうだい」

子「あつ蟻がいた。草の根っこここに」

親「どれどれ、ほんとだ、遠足みたいに並んでいるね。

どこまでいくんだろう?……」

それからの子どもの、興味や観察、対話、飼育ぶりや

疑問・感動の言葉などを書いて下さい。

夜空の星や天の川、月などを見ている子どもの言葉や
空想。

海・海浜の水遊びや砂あそび、貝拾い、海藻や、カニ
の穴探しなどの発見など。

山・丘・林・森などの言葉の理解

松、杉、ポプラなど、大きな自然の樹形の理解、など

以上思いついた例ですが、自主的に気づいたこと、遊
んだことを、一行でも二行でも書きとめて下さい。

毎年この資料は、先生も親も、幼児の心の内面の成長
の発見と理解に役立ちます。

御一緒に勉強しましょう。

幼稚園より

◆「自然」の保育をめぐる

幼稚園教育要領「自然」には、教育の四つのねらいが
説明されています。

(1) 動植物を愛護することによって、豊かな人間性を養
うことをねらっている。

(2) 自然の事象に関心を持ち、やがて科学性の芽生えと
なり、自分で見たり、考えたり扱ったりする意欲を
育てる。

科学的態度というのは、事実を尊重し実際の物事
について観察しようとする態度で、教師は科学的な
態度や、能力に深い関係がある。

(3) 生活の中の科学性について、幼児らしく適応することを考える。

(4) 科学的な思考、生活経験を通して育てていくねら
いから、数量・図形を自然の領域に入れた。など
……。

よく読み考えてみますと、山川、気象、夜の自然現象など、幼稚園では出来ないこともあり、幼稚園と家庭の環境の違いもあり、日常生活の中で、幼児の行動の瞬間を捉えてしか指導出来ない事もたくさんあります。

幼稚園と家庭とが、同一理解で幼児の経験の瞬間の指導を大切に積み重ね、T・V、電熱器具、用具などの安全な正しい使い方の指導・躾の繰り返しが大切だと、常々感じていました。

自然の指導には、教師の科学的態度や、能力に深い関係があると説明されておりますが、幼児と生活を共にする家族には、もっとたくさんのふれあいの時間があります。

す。

自然とのふれあいの生活は人間形成の一番基本的な健康なからだ、心の内面性を豊かにし、感動する心、いくしむ心、情操を育てるものであります。

宇宙の自然の創造への思考、観察などで科学性の芽生えを育て、知能の成長、発達を助ける経験にもなります。

特に動物、草花、虫などは幼児の大切なお友達であり、「生かすこと」「生きる習性」「いのち」を学ぶ大切な教材です。

飼育した小さいものの死を悲しみ、お墓をつくって野の花を供えているのを見て、何時も幼児の美しく育っている心を感じていました。

◆父母の返信から

集った夏やすみの記録三五七枚の中から、数人の幼児の姿をうかがってみました。

年長児 父

今年の夏はこどもと一緒に自然にふれあい、いろいろと勉強させられました。

生きもの（昆虫）とか宇宙のしくみなどの質問に、親の方がとまどい、答えるのにむつかしくて、子供と図鑑を取り出して、勉強をしました。

海に行くとして波はおこるの？

日食時には、写真のフィルムをとおして見ると、太陽が見えるよ。

どうして太陽が、半分になるの？

空はどこまであるの？

地震は どうしておこるの？

今まで図鑑があっても見もしなかったのが、いろいろわからないことがあると、一人で見るようになりました。

自然とふれあい、地球の生きもの、植物など、自然の

バランスにとっても大切なことを、こどもなりに知ったようです。

年長児 父

自然とのふれあいの旅に二泊三日の日程で宮城蔵王の保養所に出かけました。

エコーラインより、砂利道を十五メートル位林の中に入り、周囲には何もない山小屋です。

電気は通じていますが、電話もない所です。根が臆病なこどもなので、自然の中でいくらかでも昆虫や、動物に馴じませようと思い連れて行きました。

とんぼを取ったり、ちょうちょうを追いかけていたりして、いろいろな種類のちょうちょうがいたので驚いていました。

今後の生活に、多少でも役立てばと思っています。

年長児 母

今年はひまがなくて、どこにも出かけられませんでしたし

たが、ある朝、出窓から庭木の間に、大きなくもの巣が一晩の内に出来ていました。

子 「すごい大きなくもの巣だよ」

家族全員が出てみました。本当にみごとな、くもの巣でした。

父 「前に田んぼで作っているのを見たけど、どうしてこんなにすばらしい幾何学模様になるのかなあ」

母 「やはり向い側に一度飛ぶのかなあ」

祖父 「いや違うよ。夜の間に目標の風上において、糸を出すのさ。そして、風にとばしてもらって、一本の糸を張り、明け方にその一本の糸を伝わって、次々に巣を作っていくのだよ。」

皆で 「へえー そうなの、知らなかったね」

子 「くもの糸って、すごくねばるんだよ。この間、黒アゲハちょうがかかって死んでいたよ。」

父 「少し残酷だけど、くももそうしなければ生きていけないんだよ。」

子 「ふうん？」

幼児の夏の生活のたくさん貴重な記録が皆書けないのが残念ですが、こどもの遊びが異年令集団を通じて発展していくのと同様に、親、兄弟など、家族との関り方や、対話によって、自然への関心、興味、理解が深まり、愛情が育って行く事例がたくさん見られました。

親の感覚は、子供にストレートに伝わっていくもので、論理的なものでなくとも、幼児の鋭い感性によって、自然を正しく捉えていました。

幼児のつぶやきや、話し合いの記録を通して、一人一人の幼児の未分化な内面・興味ある遊びをうかがい知ることが出来て今後の幼児一人一人への、ふれあい方、指導の参考になりました。

家族ぐるみで、一年中の自然に気をとめて自然のふれあいで、心豊かに、たのしい毎日を過したいものです。

(宮城県聖光幼稚園)